

---

# 白雪姫sidestory 鏡と妃の物語

栖里 嘉一

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

白雪姫 *s i d e s t o r y* 鏡と妃の物語

### 【Nコード】

N1460Z

### 【作者名】

栖里 嘉一

### 【あらすじ】

白雪姫の物語が語られるその裏で紡がれる妃と鏡のお話。

4人の妃と4つの鏡。彼らが導き出すのは真実か、それとも。

友人の希望で書いたものを改稿して投稿しています。

## プロローグ

突然ですが、みなさんは「白雪姫」を知っていますか？  
有名なこのお話。

お妃は継母ではなく、白雪姫の実母だった。

王子は実は死体愛好者だった。

白雪姫は妃に復讐をした……なんて、噂もありますね。

いったいどれが真実なのか。その答えは誰も知りません。

もしかしたらそのどれもが本当なのかもしれないと考えたことはありませんか？

ほら、これを見てください。

長い年月を経て、味のある色に変化したこの木箱。

そこには彼らの記録が大切にしまわれています。

実は……木箱自身が見聞きしたことがそこには遺されているのです。  
ふふ、何を言っているんだとお思いになりますか？

彼が見守り続けた物語の顛末。お伽の国の住人達の人生の軌跡。

木箱だけが知っている、白雪姫のお話が語り継がれるその裏で、生まれてくるもう一つの物語たち。ほんのちよっただけ覗いてみましょう。

## 第一夜 はじまりの鬼畜鏡さん

白雪姫の母上が亡くなって、新しい女王がお城に来ました。ところが、この女王は魔女だったのです。

「鏡よ、鏡……世界で一番美しいのはだあれ？」

「それはお妃さま、貴方でございます」

穏やかな笑みを湛えて忠実に求める答えを出す鏡に上機嫌な女王さま。

彼女はまだ知りません。彼が繰り返すその答えは鏡にとっては何の意味もない言葉だと。

女王は、毎朝鏡に向かって「世界中で一番美しいのは誰」と聞くのが習慣でした。

ところがある日鏡に聞くと、鏡は「それは白雪姫です」と答えたのです。

お妃の機嫌をとるために様々な人間が彼女に褒め称えました。

しかし彼女の怒りは収まりません。

何度聞いても鏡は白雪姫の名前を吐くばかり。

「あの女を始末して！」

女王は怒って、家来に白雪姫を殺してしまうよう命じました。

そうして女王は、鏡に聞いてみると、鏡は「一番美しいのは、白雪姫です」と答えたので、白雪姫が生きていることを知りました。

女王は自ら行動することに決めました。

一方で不機嫌な女王に鏡は顔色一つ変えません。

これまでは誰しもが女王の機嫌を損ねまいとしてきたというのに、鏡だけは女王の思い通りにはなりません。

嫉妬に狂っていく女王の姿を見ても鏡はただその笑顔を崩さずに繰

り返される間に答えるだけでした。

ついに林檎で白雪姫の毒殺に成功した女王は平穏な日々を取り戻したかのように見えました。

しかし彼女に以前のような覇気はなくなっており、その心を占めていたのは他でもない鏡でした。

彼の言葉はただの事実にしかな過ぎない、そのことに女王は気づきました。

鏡から名前を告げられる一瞬の喜び、そして訪れるのは空虚な感情でした。

そんなある日、鏡から知らされた女性の存在に女王は半狂乱になってその場に出かけて行きました。

そこで待ち受けるものを彼女が知るはずありません。

あとには結婚式の招待状と、鏡だけが残されました。

「彼女が踊る姿はさぞ美しいだろうね」

主人がいなくなった後でも、いつもと変わらぬ顔で鏡は微笑みました。

白く細い脚、赤く燃える靴、振り乱される金色の髪。

そして耳を裂く高い声 恐怖に引き攣る顔。

鏡の脳裏には女王の姿がはつきりと浮かび上がっていました。

「この世で一番美しい」

鏡は呟くと、蕩けるような笑みを浮かべました。

それを影から見ていた木箱はその表情に愛さえ感じて眩暈がしました。

哀れな女。歪んだ鏡に魅せられて。

「美しさに順位をつけるなんて、さ」

木箱の咳きは誰にも届かず空気の中に消えました。

## 第二夜 ゆーあーまいん。

「なんですって?」

自分の耳を疑いつつ、お妃は鏡を覗みつけた。

「あ、あの、でも僕は！お妃さまのほうがずっと好きです。とって  
も綺麗だと思ってます!」

鏡の必死の訴えにもお妃は耳を貸さなかった。すでにその頭の中は  
白雪をどう葬るかで埋め尽くされていた。

「その眩い金色の髪！ 透きとおる肌！ 吸い込まれそうな青い瞳  
!!!」

「あなた、もつと語彙を増やしたほうがいいわ」

「……!」

「鏡ですからね、お妃さま。勘弁してあげてください」

鏡にしゅんと垂れている耳が見えてくるかのようで、木箱は思わず  
口をはさんだ。お妃に冷たくあしらわれた鏡はかわいそうなくらい  
落ち込んでいた。

一週間後、再び訊かれた問いに鏡は恐る恐る答えた。

「あの娘、まだ生きてるの?」

向けられる冷たい視線に鏡は息をのんだ。

「う、ごめんなさい」

「あなた……苛々させないで」

鏡は怯えたように口を噤んだ。二度の失敗はお妃さま不機嫌にさせ  
ていた。

だけど、お妃さまは諦めなかった。

「もちろん！貴女が一番、この世で誰よりも美しいです」  
このときを待っていたとばかりに意気込む鏡は自分の頭で思いつく限りの言葉で精一杯お妃を褒め立てた。拙い言葉にも、お妃は白雪姫に勝ったという事実で満足したようだった。久し振りのお妃の笑顔に鏡はぱたぱたとしつぱを振った。ように木箱には見えた。

それからは穏やかな日々が続いていた。

「この世で一番美しいのは誰かしら」

「それは、お妃さまです！」

「……とかなんとかいって、白雪姫が一番美しいって言ったのはどの口かしらね」

元気いっぱいに叫んだ鏡にお妃は意地悪くほほ笑んだ。対する鏡はおろおろとするばかりだ。微笑ましいやりとりに木箱の顔も綻んだ。

7

そんなある日、お城に一通の招待状が届いた。

それはお妃の目に留まる前に、真実を映し出す鏡の知るところとなった。

「どうしよう……どうするの？ お妃さまが僕のいうこと聞いてくれるとは思えないし……でもこのままじゃ」

「白雪は一度死んだ、王子はそれがよかったみたいだけど。君にならできることがあるんじゃない？ 死人はこの世界にいてはいけない。それがこの世の理でしょ」

悩んだ鏡は木箱の言葉について決心をした。

「ちょっと、あの鏡はどこへ行ったのよ」

尖るお妃に木箱は素知らぬ顔で応えた。

「さて、どの鏡でございますか」

「あの……あの、お世辞の一つもうまく言えないうるさい鏡よ！」

「白雪のところに送りました。あれの希望ですよ」

平然と言う木箱にお妃は啞然とした。同時に彼女の心にまたどす黒い感情が渦巻いた。

「どうということ……？」

「貴女のもとにも結婚式の招待状が届いたでしょう。あの鏡は真実を映しにいったのです。安心してください。白雪がいなくなれば貴方が一番美しいのは確実ですよ」

「そういう問題じゃ……！」

「あれの最初で最後の我が儘です。受け入れてやってください」

お妃はへなへなと座り込んだ。そして力なく首を振った。

「そうしたら、私は、どうしたらいいのよ……どう……」

「貴女には新しい鏡をご用意しますよ。でも、もしも」

木箱は妃に手を差し伸べて優しく笑いかけた。

「もしも貴女がどうしても言うならあれを取り返してくるのも

それもまたいいかもしれませんね」

### 第三夜 恋に必要なもの

お妃は誰の言葉も信じなかったが、唯一、鏡の言葉だけは信用していた。その鏡は魔法の鏡。曇った鏡は普段は何も映さない。しかしお妃の問いかけに応えて真実を映し出す。

「この世で一番美しいのは誰？」

「それは貴女、お妃さまが一番美しい」

鏡に笑いかけるお妃は、それは綺麗な人だった。

一方で白雪姫は美しく成長していた。

「この世で一番美しいのは誰？」

「それは、白雪姫です」

鏡に映し出された白雪の姿にお妃は目を吊り上げた。そして怒った勢いで狩人に命令を下した。鏡はそれを大人しく見守るだけだ。

「何か言ってあげればいいのに」

「私に語る資格はありません」

ただ真実を映すこと。それが鏡に与えられた使命。

「尋ねられたことに答える、それだけです」

「白雪が一番だなんて認めてないんだろ？」

「……私はお妃さま以外の質問に答える気はありませんから」

「おやおや」

相好を崩す木箱に鏡は煩わしそうに目を閉じた。

そして、狩人の働きに満足したお妃は鏡に尋ねた。

「この世で一番美しいのは誰？」

まるで恋人にするように甘えた声。しかし流れるように返された鏡

の言葉にお妃は自分の耳を疑った。

「あの娘がまだ生きているっていうのね」

嫉妬が渦巻く彼女の頭の中は白雪姫で一杯だ。

「恋してるみたい」

それをみて木箱が嗤った。鏡は表情を変えない。

「君も素直になったらどう」

「私はいつだって正直ですよ」

木箱は小さくため息をついた。

「真実を映しても、肝心なことは言わないんだから」

お妃は白雪姫の殺害する計画を立てるのに夢中だ。木箱はそつとその横に移動してお妃に進言し始めた。鏡はその並んだ背中を見つめた。彼は自らの力で動き回ることにはできない。

すでに寝所は深い夜に覆われていた。するりと暗闇から手が伸びてお妃の手に触れた。鏡に映る美しい虚像に、細く美しい指に絡む男の手。鏡の中の戯れを彼女が知ることはない。

「なんてこと、あの娘はこの手で殺したはずなのに！」

計画が失敗するたびに、お妃の憎しみは白雪姫へと向けられた。鏡が白雪姫の名前を告げるたびに彼女の自信は傷つけられた。

「見てご覧よ。あの嫉妬に狂った醜い顔」

木箱が呆れた声を出す。鏡は妃のその姿を見つめた。その目には届かぬ熱が籠っていた。

「こつちにも一人……ってとこかな」

木箱は大げさな身振りで息を吐き出した。

ようやく三度目にして、白雪姫は毒の林檎に倒れた。

「ふふ……やっぱり、私が一番……」

うつとりと鏡を眺めるその姿はぞっとするほど美しかった。ようや

く取り戻したプライドからか、お妃は朝夕といわず日がなそうして鏡の前にいるのだった。

木箱はそつと近付いて鏡に囁いた。

「うれしそうだね。お妃さまはまたずっと君を見ている」

「あの方が世界で一番、いや、愛しているのはご自身だけです。その瞳に映るのも……」

鏡は目を伏せた。だが彼はそれで充分なようだった。

あるとき、結婚式の招待状が届いた。鏡とお妃の間に割って入る第三者。

「おやおや、結婚式の招待状だって。誰からだろうね」

「私には関係ありませんから」

「嘘つき……」

「……私の言葉が彼女に届くことはない、そうでしょう」

木箱は思いつめた鏡のその表情をただ視界の端に捉えただけで何も言わなかった。

その晩もお妃はいつものように質問を繰り返す。

「鏡よ、鏡。この世で一番美しいのは誰？」

「それは貴方です、お妃さま」

しかしいつもと違うのは鏡の表情。淡々とした声ではなく、愛しさを隠さないその微笑み。知ってか知らずかお妃の表情も柔らかい。

「今も昔も、これから、貴方が世界で一番美しい。貴方より他に美しい女性は存在しません」

「当たり前じゃない……」

そのとき、鏡の隅に小さな罅が入った。鏡に映る自身の姿しか目に入っていないお妃は気づかない。鏡がしゃべるたびにそれは大きくなりついに鏡は割れて飛び散った。そして、彼の想いは彼女の心を貫いた。

木箱の足元で重なり合った硝子が音をたてた。眼下には投げださ

れた美しい肢体。

「あーあ、これで満足なのね。……おやすみなさい」  
よい夢を。

細かな破片が窓から差し込む光に煌めいた。

## 第四夜 幸せの基準

世界一と謳われている、否、云われていた女性の美しく整った顔が引き攣った。無理やり作った笑顔が怖い。

「どーという意味よ、それは」

「そのまんまだ」

「笑わせないでちょうだい。私のどこにあの子が勝っているっていうの」

「まあ一番の敗因は若……」

「あんたね、それ以上言ったら叩き割るわよっ」

今にも殴りかかってきそうな剣幕でそう言つと、どすどすと足を踏みならして部屋から消えた。折角の美貌が台無しだ。鏡の隣で木箱が笑った。

「一番の問題はその性格だよねえ。まあ可愛いっちゃ可愛いけど」

さほど待たずして、彼女は鏡の前に現れた。勇ましい仁王立ちをして。自信に溢れたどこか満足気な顔。鏡はそつと溜息をつく。

「さあて、答えてもらいますか。この世で一番美しいのは誰なのかをね」

「もう誰でもよくないか」

「いいわけではないでしょ。あなたに口応えする権利はないのよ。とつとと答えなさい」

鏡が涇々とその名を告げると彼女の顔から血の気が引いた。握りしめられた両手が震えている。

「あの野郎……。まったく、役に立たないんだから」

部屋を飛び出して姿を消した彼女を木箱の呆れた声が見送った。

「ねえ、あれ本当に一国のお妃さまなわけ？」

鏡は何も言わなかった。

「何してきたんだ」

「なんでもいいでしょう。それより、あなた。この世で一番美しいのは誰かしら」

自分の勝利を信じて疑わないその瞳。鏡には映し出された事実を喋ることしかできない。

「そんなに期待された目で見られてもな……」

「何よ、はつきり言いなさいよ」

数分後、妃は部屋に置いてあるものに手当たり次第怒りをぶつけてから去っていた。

「あーあ、今日も荒れてるねえ」

「……いい迷惑だ」

「私にはあなたが一番美しい、ぐらい言ってあげればいいじゃない」  
「俺に美醜はよくわからん」

そっけない鏡に木箱は肩を竦めた。

妃は再び動いたようだった。彼女は一度の失敗では諦めることはないらしい。その行動力は称賛するべきか。

「この私にかかればあんな小娘一人どうってことないのよ。この世で一番美しいのは、私でしょ?!」

得意げなその態度。取り繕ってはいるが必死さが伝わってくる。鏡が答える前に横やりが入る。

「はいはい、もーさあ、そう思ってるならいいじゃないですか。わざわざ鏡に答えてもらわなくても」

お妃はぎつと音が聞こえてきそうな勢いで木箱を睨みつけた。それに構わず鏡は淡々と答えた。

「白雪が生きてる限り、あの子がこの世で一番美しい」

「何言ってるの。だから私が。……まさか」  
続きは言葉にならなかった。

そして。

「白雪が消えた今、あなたがこの世で一番美しい」

凄まじい執念でついに目的を達成し、妃は満足した日々を暮らしていた。しばらくして木箱は鏡に話しかけた。

「何か　不満そうだね」

「別に……ただ、不思議なだけだ。美しいといわれることにそんなに価値があるか？」

「まあ、人それぞれだよな」

木箱は鏡を横目で見遣った。乙女心に疎いこの鏡。

「君にとつては意味のない言葉だもんね。……じゃあさ、君にとつて価値のある言葉って何？」

わざとらしく首を傾げた木箱に鏡は珍しく言葉を濁した。

あるとき、お城に招待状が届いた。白雪からのメッセージに気色食む妃を木箱と鏡は宥めようと努めていた。しかし興奮した彼女は聞く耳を持たない。

「行かないほうがいい。彼女を消すつもりだろう？」

「当たり前でしょう！」

「白雪がいなくなっても何も変わらないだろう。自分に自信がないから、気持ちに余裕が持てないんだ。そうしていつまでも怯えて暮らすのか？」

「だったらどうしろっていうのよ……！」

「なあ、白雪を殺すより、もっと簡単な手があるだろう」

妃は何か言いたそうな目をして口を引き結んだ。鏡は辛抱強く彼女の言葉を待った。

「鏡よ、鏡、鏡さん。あなたがこの世界でもっとも愛してるのはだあれ？ ってね」

「お前は黙ってる!!」

鏡は余計なことを言う木箱に突っ込んだ。

「俺は甘い嘘も囁けないし、あなたを喜ばせる飾った言葉も持たない。だけど真実を伝えることはできる。それは一番よく知ってるだろっ?」

「ねえ……」

彼女の口がゆっくりと動いた。頼りなさげに、しかしその瞳は期待を含んで。

鏡は微笑んだ。

普段の表情からは考えられないほど優しく。

「もちろん。それはお妃さまでございます」

こうしてお妃さまは毎晩鏡の出す答えに満足して眠るのです。めでたし、めでたし？

## エピソード

さて　いかがでしたでしょうか？  
随分変わった……いえいえ、個性的な面々でしたね。

木箱は順位をつけたり、幸福を判断したりすることはありません。  
それぞれの物語を綴り続けるだけなのです。

4人の妃と4人の鏡、その数だけ愛の形があり、結末があるようです  
ね。

ああ。沢山の思いをその胸に秘めて、木箱はまた眠りについたよう  
です。

彼がまた口を開き始めるいつかの日までしばしのお別れです。

それではみなさん、そのときにお会いしましょう。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1460z/>

---

白雪姫sidestory 鏡と妃の物語

2011年12月11日03時53分発行